

柳田 国男

鳥越 皓之（早稲田大学人間科学学術院教授）

柳田国男には、頑固ともいえる実証主義への信頼がある。当初、柳田自身がその学問を新国学と命名したように、柳田民俗学は、方法論的に国学からの強い影響下にある。国学者にも幅があり、柳田は実証性を重んじる本居宣長をわが師と仰ぎ、平田篤胤の観念性を嫌っている。もっとも、平田篤胤が観念的だと言っても、前世のことをよく記憶している勝五郎や、仙境の体験者である寅吉から直接聞き取りをして、あの世というものを理解しようとしたりもしている。しかし柳田の立場に立てば、平田はあの世について、前もってある種の観念をもっており、その支えとして事実（実証）を使っているという批判になる。ある種の観念とは、たとえば国学者たちが発展させてきた「顕幽二元論」などを指すのだろう。

それに対して、本居宣長は表面的解釈を嫌い、事実をにらみ、事実からのみ、その本質を探り出そうとした。そして事実の本質を実情と呼んだ。本居はその著『初山踏』などで「実の心の有様」の必要を説いている。事実を摘出するということは、摘出する主体（たとえば研究者）がいるのだが、その主体が前もって保有している観念の体系から事実を観察（あるいは解釈）するのではなく、感知できる事実の本質（実情）を知るべきだとしたのである。



柳田国男

事実とその事実をとらえる主体との関係において、主体の没却ではなくて、主体の大切さを本居などの国学者は考えた。柳田はこの方法論をうけつぎながら、それに加えて、幕末国学のひとつの流れである「草莽の国学」

を受け継いでいるようにも見える。佐藤信淵や鈴木牧之たち草莽の国学者たちは、各地方の農村や山村へ入っていき、村人の暮らしを記述し、彼らの生業の生産性の向上に腐心した。歴史家の芳賀登が幕末の彼らの行動（研究）を近代化運動と指摘したが、明治・大正・昭和を生きた柳田の学問にもこの種の固有の近代化運動の姿がある。

第2次世界大戦直後、柳田は『婚姻の話』を出版しているが、そこには、これから結婚する若い男女が階層の高い人たちの間で普通であった「見合い結婚」をそのまま真似るのではなく、自分たちの気持ちとして正直な「恋愛結婚」をキチンと自分たちで考えるべきだと民俗学的データをそろえて主張しているあたりに、「実情」そして「近代化運動」が出ている。

鈴木栄太郎や有賀喜左衛門をはじめとする社会学の初期の実証的な研究者たちは、柳田民俗学から実証的な調査法を学んだだけではなくて、民草（草莽）の生活改善という実践的な課題をかなり強固に保有していたといえる。その後、社会学者の多くは欧米の実証研究の方法論の採用や科学的洗練を好み、その結果、この「実情」と「実践」についての関心を弱めることになった。新しい調査法は、社会調査にプラスの面をもたらしたことは明らかであるが、他面、社会学者などの研究者に現場の窮状と格闘し、本居や柳田が重視した「実情」を理解する機会を著しく減少させたのも否定できない事実である。

シカゴ学派の社会学者：ポール・G. クレッシー

中野 正大 (奈良大学社会学部教授)

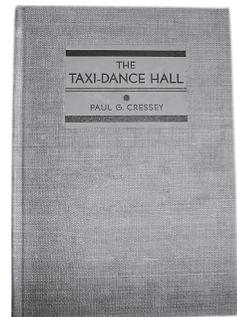
1892年シカゴ大学の創立と同時に開設された社会学部は1920年代から30年代にかけて黄金時代を迎える。この時期同僚のバージェスと共同して大学院生の指導にあたったパークは年々急激に膨張するシカゴ市をまさに社会的実験室として調査研究に従事させる。これらの調査結果は学期末に提出するターム・ペーパーと呼ばれる研究レポートとしてまとめられ、これをもとに修士論文や博士論文が書かれて行く。これらはシカゴモノグラフと呼ばれ、そのうちの多くが社会学叢書としてシカゴ大学出版会から刊行されて行った。

ここで紹介するシカゴ学派の社会学者ポール・G.クレッシーはこの社会学叢書の一冊、『タクシーダンス・ホール』の著者である。1932年に出版された本書も、クレッシーが29年に『シカゴの閉鎖的ダンスホール』と題して提出した修士論文を元にして書かれた著作である。

クレッシーが調査対象としたタクシーダンス・ホールとは、当時アメリカの大都市の歓楽街にあだ花のように咲いた、風俗店とでも呼べるきわめていかがわしい娯楽施設であった。そこでは客となる男性が通例、1曲10セントの料金を払って若い女性ダンサーと踊ってもらうのである。客が払った料金の半分はホールや楽団の費用を払う経営者に渡り、残りの半分がダンサー本人の手に入る仕組みであった。ホールで雇われている女性ダンサーたちは、指名されたらどんな男性とでも相手になって踊らなければならない。客の支払った料金分だけの時間、ダンスの相手をするのである。このことから彼女たちは「タクシー・ダンサー」と呼ばれた。ちょうどタクシーの運転手のように、客ならだれとでも相手をし、踊った時間と与えたサービスに応じて料金が支払われるのである。

クレッシーがこのタクシーダンス・ホールの調査に着手したのは1925年のことである。ちよ

ど彼がケースワーカーとしてまた特別調査員として働いていたシカゴ青年保護協会から、この新奇のしかもその実態が全くわかっていなかった男性客しか入れない「閉鎖的なダンスホール」について報告するように求められたことによる。こうして彼は調査に取り掛かることになるが、それについて公刊された資料もほとんどなく、あっても全く役に立たなかった。そこで最初フォーマル・インタビューによって情報を収集しようとしたところ、当然ながらダンスホールの経営者や関係者から全く協力が得られなかった。このためクレッシーはそれを断念し、代わってとった方法が参与観察だったのである。仲間の大学院生にも協力してもらい、観察者としてタクシーダンス・ホールに入っていたのである。そこでは彼自身も記しているようにダンサーとそこにやって来る客と「見ず知らずのストレンジャーとしてまた偶然の知り合いとして」振る舞い、情報を収集した。こうしてダンサー嬢と客がくりひろげるタクシーダンス・ホールの社会的世界を鮮やかに描き出したのである。当時参与観察という言葉はまだ一般的なものではなかったので、彼自身この方法を参与観察という言葉で呼んではいない。だが参与観察は1932年の『タクシーダンス・ホール』の出版にその源を遡ることができるといわれる。その刊行は、参与観察の古典として広く知られる、同じシカゴ大学に提出された博士論文、ウィリアム・F.ホワイトの『ストリートコーナー・ソサエティ』の出版よりさらに11年前のことであった。



The Taxi-Dance Hall

1932年初版本